

## 鶴沼を語る会創立 40 周年記念講演会

# 『鶴沼の作家 阿部昭を語る』

2015 年 11 月 21 日、鶴沼公民館ホールで『鶴沼の作家阿部昭を語る』と題し講演会を行なった。鶴沼を語る会と鶴沼公民館との共催、160 名余の来場者があり盛況だった。藤沢市片瀬に 50 年余在住し阿部昭とも交遊があった作家の佐江衆一氏が、「阿部昭の文学と鶴沼での交遊」について話した。



講師の佐江衆一氏

講演会前半は鶴沼を語る会企画の『阿部昭の鶴沼風景』スライドショー。阿部昭の鶴沼描写の文章と写真集「鶴沼の五十年」を出した福地誠一（故人）の写真を重ね、往年の鶴沼を再現したもので、文章の朗読は持田玉枝会員が担当した。この内容を小冊子にしたものが来場者に配られた。

講師の佐江衆一氏は阿部昭の文学について話した。とりあげた作品は文学新人賞受賞の処女作ともいべき『子供部屋』（1962 年）、代表作のひとつ『司令の休暇』（1970 年）、毎日文化賞受賞の『千年』（1973 年）、芸術選奨新人賞受賞の『人生の一日』（1976 年）、短編小説の名手阿部昭のベストセラー『短編小説礼讃』（1986 年）。また芥川賞候補になった 6 作品—『巣を出る』（第 50 回/1963 年下期）『幼



鶴沼地区内外、市外から 160 名を越える人たちが聴講

年詩篇』（第 53 回/1965 年上期）『月の光』（第 55 回/1966 年上期）『東京の春』（第 58 回/1967 年下期）『未成年』（第 60 回/1968 年下期）『大いなる日』（第 61 回/1969 年上期）を挙げ、作家の視点からみた芥川賞選考の裏話にもふれた。

佐江氏が初めて阿部昭と会ったのは、江の島

のヨットハーバー。阿部昭から誘いがありヨットハーバーのレストランに赴いた。そこにはもうひとりの作家・立原正秋がいたという。さらに一緒にテニスを楽しんだ思い出など、鶴沼での交遊についてユーモラスな話が続いた。



講演会には阿部夫人と次男の阿部龍二郎氏も出席され、最後に挨拶を戴き閉会となった。

\*

阿部昭（1934～1989年）は54歳の若さで亡くなったが、広島市で生れた翌春には鶴沼に移り、1歳から亡くなるまでのほとんどを鶴沼で過ごした。藤沢市の幼稚園、小・中・高校に通い、東京大学文学部フランス文学科に学んだ。1959年、ラジオ東京（現TBS）に入社、番組制作の仕事の傍ら小説を書いた。1970年発表の海軍軍人だった父親の死の前後を書いた『司令の休暇』が注目を集め、翌年TBSを辞し作家活動に専念する。

阿部作品のテーマは自分の家族を取り上げたものが多く、その舞台は鶴沼で作品の遠景には常に鶴沼風景が出てくる。数多くの小説、エッセーを残し、『阿部昭全作品』全8巻（1984年 福武書店）と『阿部昭集』全14巻（1992年 岩波書店）がある。